

第9回東北大学歯学会講演抄録

日時：昭和61年6月21日午後1:00～3:00

場所：東北大学歯学部B棟第一講義室

— 一般演題 —

1. 興味ある所見を呈した歯牙腫の一例

千葉雅俊，越後成志，五十嵐隆，松田耕策，手島貞一
(口腔外科2)

歯牙腫は1821年 Oudet により報告されて以来数多くの報告がなされているが，本疾患が奇型なのか腫瘍なのかについては議論のあるところである。我々は過剰歯に近接し，一部に ameloblastic fibroma 様の組織像を伴った compound composite odontoma の一例を経験したので報告した。

患者：9歳，男性。主訴：左下顎臼歯部精査。家族歴：父親と妹に上顎正中過剰埋伏歯を認めた。現病歴：約3年前， \overline{D} をウ蝕のため抜歯。1年後，歯牙様のものが萌出。昭和61年2月，歯科医よりX線診で \overline{D} 部に奇型歯があると言われ，当科を紹介され来院。現症：全身状態良好。口腔内は \overline{D} 部に4mm程の円錐状の歯牙様のものが見られ， \overline{CDE} 頬側部に骨様硬の膨隆を認めたが，炎症所見はなかった。X線所見： $\overline{45}$ 歯冠上に十数個の小歯牙様構造物があり，また上顎正中部に過剰埋伏歯を認めた。処置及び経過：集合性歯牙腫の臨床診断のもとに， \overline{CE} 及び \overline{CDE} 部頬側歯槽骨を含め腫瘍を一塊として摘出し， $\overline{45}$ を開窓状態にして開放創とした。現在， $\overline{345}$ が萌出してきており，術後経過良好である。

摘出物は病理組織学的に正常歯と同様の歯牙硬組織成分を有する compound composite odontoma であった。

本症例の場合上皮成分が多く認められ，現在も硬組織を形成している所見がみられ，また一部に ameloblastic fibroma 様の組織像を伴っており，過誤腫というよりは腫瘍と判断するのが妥当かと思われた。また萌出した過剰歯と歯牙腫内の歯牙形態を比較すると，前者がよく発達しており，各々別々の歯胚に由来する可能性が示唆された。本症例は家族性に上顎正中過剰埋伏歯を伴っており，過剰歯胚を形成し易い性質を備

えていることが考えられ，興味ある症例と思われた。

2. 骨形成不全症の歯に関する病理組織学的観察

後澤孝和，大家 清（口腔病理）

骨形成不全症は常染色体性優性遺伝を示し，間葉性組織の障害の一症候として歯の異常がみられる。それは象牙質形成不全症（Shields I型）とよばれ，骨形成不全症の肉眼，レ線の診断に価値がある。

目的：骨形成不全症の一症候として原発的に障害された象牙質を病理組織学的に観察し，ヒト象牙質にみられる異常像をしる。

材料及び方法：骨形成不全症の6歳女・乳歯1本，12歳女・永久歯2本，13歳女・永久歯2本を抜去後，通法により非脱灰，脱灰切片を光顕，CMR，電顕にて観察した。

結果及び考察：乳歯，永久歯共に肉眼的に歯冠部，歯根部は半透明で黄色ないし褐色の変色を示した。エナメル象牙境，外被象牙質はほぼ正常であるが，髄周象牙質は多様な組織像を示した。即ち（1）象牙細管の数が少なく，その太さ，走向，分布が不規則であった。（2）光顕では球状，楕円状ないし棒状の空隙が多数みられ，電顕では細胞成分が小腔様，細管様構造物にみられ，管周象牙質の形成は不明瞭でコラーゲンの配列は不整であった。（3）間質性象牙粒がみられた。（4）成長線が明瞭化し，球間区に富み，石灰化は均一でなく球状，層板状にみられた。（5）歯髓腔は閉塞例と拡大例がみられ，歯髓細胞の変性，萎縮が著しかった。（6）根管部歯髓には限局性の内部性吸収がみられた。また，骨形成不全症の歯は正常の象牙質形成のメカニズムを理解する上で意義があると考えられた。

参考文献：1) Rushton, M.A.: The structure of the teeth in a late case of osteogenesis imperfecta. J.Path. Bacteriol. 48: 591-603, 1939. 2) Gardner, D.G. and Farquhar, D.A.: A classification of dysplastic forms of dentin. J.Oral Path. 8: 28-46,

1979.

3. ハイドロキシアパタイトを用いた顎堤保存に関する基礎的・臨床的研究

庄司 茂, 鈴木祐平, 渡辺郁子, 堀内 博 (歯科保存 1)

篠木邦彦 (口腔外科 1)

生体組織と親和性を有する無機材料の開発が進み, バイオセラミックス, 中でもハイドロキシアパタイトが注目を集め, 人工歯根や骨欠損補填材料として臨床応用されている。

Denissen ら (1979) は, 抜歯後の顎堤の吸収を防ぐ目的で, 円柱状のハイドロキシアパタイト緻密体 (以下 HAC と略す) を, 抜歯窩に埋入し, 臨床的にも効果が得られたと報告しているが, Denissen らが用いた HAC は, マンガンなどの不純物を含んでいるため, 青紫色を呈している。

今回, ハイドロキシアパタイト純度 99% で, 白色透明で, しかも円柱状の他に卵円形など 8 種類の HAC を入手し, 同様の実験を行った。

〔術式〕 抜歯窩に金属性プローブを挿入し, 抜歯窩の深さや歯槽骨の高さを測定した。そして, HAC の上端が歯槽骨頂より 2 mm 下になる HAC を選び, 抜歯窩に挿入し滅菌綿棒または根充用ピンセントで HAC を上から圧迫した (縫合せず)。

〔結果〕 成犬の上顎側切歯, 下顎前臼歯を用いた実験で 9 カ月間観察した結果は, X 線的にも病理組織学的にも HAC の上部が骨によって被覆されていた。患者の同意のもとで臨床応用を行い, 2 日から 1 年 5 カ月間合計で 7 症例の経過を観察した。抜歯後ドライソケット様を呈し 2 日後に除去した 1 例を除いて, X 線的にも HAC は骨で被覆され, 義歯床下粘膜の腫脹や疼痛, HAC の露出といった臨床症状は認められなかった。

〔考察〕 根部のウ蝕が深くまで進んだ症例, 歯周疾患と根尖部病変が合併し, 保存不能と思われる症例などでは, HAC を用いて顎骨の吸収を防止することは, 意義があると思われる。

4. 口臭を主訴とする患者の口内気体中硫化物量と症状との関係についての研究

小原陽子, 岩倉政城, 島田義弘 (予防歯科学講座)

ガスクロマトグラフィを用いて口臭を主訴とする患者の口内気体中硫化物定量を行い, どの物質が口臭に

関与しているかを検討した。併せて口臭と関係あると思われる口腔内症状の診査及び幾つかの検査を行い, 両者の結果を比較し, 口臭診断上意義のある症状及び検査法を模索した。

口臭を主訴とする外来患者 19 名について問診 (口臭の自・他覚, 人の態度から気にしているか), 歯科医師の嗅覚による口臭判定, ガスクロマトグラフィを用いての口内気体の分析, 口腔内診査 (う蝕, 排膿, 出血, 食片圧入, 舌苔, P.I., DI, CI, OHI), 患者の嗅覚能力検査, 質問紙調査 (C.M.I. 健康調査, Y-G 性格検査) を行った。

これによって得られた成績の検討から,

1. 嗅覚により口臭ありと判断された患者に 3 種硫化物 (硫化水素, メチルメルカプタン, ジメチルサルファイド) が多く ($P < 0.05$), この内メチルメルカプタンは口臭のある患者に必ず存在し, 口臭の主な原因物質であると判断した。

2. 口腔内症状のうち DI とメチルメルカプタン ($P < 0.001$) 並びにジメチルサルファイド ($P < 0.01$), OHI とメチルメルカプタン並びにジメチルサルファイド (共に $P < 0.01$) 間に統計学的有意な正の相関を認めた。

3. イソ吉草酸の嗅覚閾値の高い者ほど口内気体中メチルメルカプタン, ジメチルサルファイドが多い傾向にあった ($P < 0.05$)。

4. 口臭の自・他覚, 人の態度から気にしている事と硫化物量との間に特別な関係は認められなかった。

5. C.M.I. による I~IV 型と硫化物量, Y-G 性格検査による型別と硫化物量との間に特別な関係は認められなかった。

5. ポピドンヨード希釈液の口腔内消毒薬としての効果について

佐藤秀一, 佐藤成美, 鈴木正規, 藤田 靖 (口外 I)
谷津寿郎, 小野田和広 (臨検室)

口腔内消毒薬としてイソジン液 (ポピドンヨード 100 mg/ml, 有効ヨウ素 10 mg/ml) を用いる場合の有効希釈倍数を知るため, 唾液を主検体とし各希釈倍数における口腔内細菌の増殖の有無を調べ, 同時に病原菌に対する効果, 有機物混入時の効力低下も調べたので報告した。

材料, 方法. 試薬: イソジン滅菌蒸留水希釈液. 培地: GAM ブイヨン培地, GAM 寒天培地, 血液寒天培地. 検体: ① 唾液. ② 唾液遠心分離後の沈殿物. ③